

久保田万太郎の初期俳句

田部知季

一 はじめに

「わたしの俳句は、わたしといふ小説家の、戯曲家の、新劇運動従事者の余技でしかない」(『も、ちどり』、一九三四・六、文体社、「跋」)——よく知られるように、久保田万太郎は自らの俳句を「余技」と位置づけていた。一方、そうした本人の認識とは裏腹に、彼の多彩な文業のなかにあつて、まず俳句に指を屈する論者は少なくない。たとえば戸板康二は、万太郎の俳句に「追隨を許さない独特の句境」を認め、彼の「全芸術の中で、俳句が最も高く評価されても、それはまちがっていないのである」と断言する^①。しかし、万太郎が俳句を「余技」と位置づける以前、未だ戯曲や小説を著しておらず、「暮雨」の俳号を用いていた明治期の俳業は、これまで十分に検証されてこなかった。

たしかに万太郎自身、第一句集『道芝』(一九二七・五、俳書堂)

の自跋において、同集に漏れた往時の句は「すべてを未練なくわたしからふり捨て、悔いなくつもりである」と綴っている。そのこともあつてか、今日愛誦される彼の著名句——「時計屋の時計春の夜どれがほんと」や「湯豆腐やいのちのはてのうすあかり」等——は概ね大正期以降の作であり、後年の句集に載らない明治期の句はほとんど議論の埒外に置かれてきた。加えて、中央公論社版『久保田万太郎全集』第十四卷(一九六七・六)の「季題別全俳句集」と、第十五卷(一九六八・六)の「季題別全俳句集 拾遺」では、『国民新聞』掲載句を除く明治期の句には概ね出典を付しておらず、遺漏も多い^②。従来万太郎研究はそうした偏りに無自覚のまま、後年に編まれた一部の句集や「全俳句集」から安易に万太郎俳句の全貌を描き出そうとしてきたのでないか。本稿では、実際に当時の新聞雑誌に載る暮雨句や句会報を参照することで、これまで等閑^{なほり}にされてきた初期の万太郎俳句の様相を考察する。

まずは『道芝』の跋文に抛りながら彼の俳歴を簡単に確認してお

こう。明治二十二年生まれの万太郎は、同三十九年、東京府立第三中学校で四年への進級試験に落第し、慶應義塾の普通部に再び三年生として転校する。「みやう見真似」で句作を始めたのはこの頃からで、同時代の俳壇には疎かったが、早くから正岡子規の著作は読んでいたという。その後運座に関心を持ち、「深川の秉燭会、新橋の竹馬会、牛込の行余会」といった秋声会系の句会に出席すると、度々句を抜かれて好成績を収めた。

一年ほどして同級の大場白水郎とともに三田俳句会に加わり、岡本癖三酔や靱山江戸庵（庭後、梓月とも号す）、吉村椿花（江戸庵の実弟で、後の上川井梨葉）らが集うこの会で、「運座」の澄明な空気を感得すると同時に、真実な、つ、ましい、しみじみした俳句の生命感に触れることが出来た」という。さらに、この会に参加していた『俳諧草紙』の同人に誘われ、同誌発行所の例会に出席、渡辺水巴や岡本松浜らを知る。松浜選の『趣味』俳句欄に熱心に投句したが、松浜が東京を去ることになると、万太郎は松根東洋城に預けられ、彼が選句を担当する『国民新聞』の俳句欄（「国民俳壇」、¹「国民俳句」と呼ばれた）に活躍の場を移すこととなる。

一連の俳句修行の期間は、「慶應義塾普通部の五年の春から同じく大学予科二年の秋まで」、すなわち「明治四十一年の三四月ごろから四十二年の十月ごろまで」のおよそ一年半に過ぎないが、その間に彼の「俳諧生活はすゝむところまですゝんだ」という。だがその頃台頭し始めた『白樺』や『スバル』、『三田文学』の新たな文芸

思潮に感化され、万太郎はしばらく俳句から離れて小説や戯曲に専念する。小説「朝顔」が『三田文学』に掲載されるのは明治四十四年六月のことである。そして五年ほど経った大正五年秋、岡村柿紅や田村車前草、喜多村緑郎らによる運座、句楽会に誘われて再び俳句を嗜むようになり、俳句は万太郎にとって「公然^{おっけ}嗜^けれての「余技」になる」。

大方の先行論でもこの『道芝』跋文に拠って万太郎の俳歴を確認しているが、⁽³⁾戸板康二『久保田万太郎』（前掲⁽⁴⁾）はその他の資料も交えながら考証しており益する所が大きい。そうした来歴を踏まえたうえで問題となるのが、彼の句風に対する評価である。安住敦は、万太郎の句を以て「国民俳壇の頃から一つの完成を示してゐた」とする反面、「その句脈は終始一貫しながらも、しかも、きはめて⁽⁵⁾隠微なところで、少しづつ変つて来てゐる」と述べている。『道芝』以降の句集を想定した発言ではあるが、ここでの安住は「一知半解に、所謂万太郎調なる概念をもつてこの作家の俳句を規定すること」に対して批判的である。

しかし、万太郎俳句に関する先行論の大半は大正期以降の句に注目しており、安住の言う句風の微細な変化を跡づけることには意を用いていない。⁽⁶⁾たとえば楠本憲吉は、『道芝』以降の「万太郎俳句の一貫性・均質性の恐るべき強靱さ」に驚嘆し、⁽⁷⁾「出発の姿勢がそのまま到達の姿勢であるというまことに稀有な俳歴の持ち主」と称揚する。⁽⁸⁾他方、高柳克弘は「下町の抒情俳人」という従来の万太郎

郎評価を見直す目論見のもと、「写生」に囚われないその多面性に光を当てるが、そこでも明治期の句は概ね除外されている⁽⁹⁾。

一連の先行論では大正期以降の「万太郎調」が評価の根底にあり、暮雨時代の句はそれを補強する傍証として後年の句集から僅かに取り上げられるに止まる。だが、そうして析出されるのはあくまでも句集編纂時の選句眼に基づく「万太郎調」であり、そこから万太郎俳句の「一貫性・均質性」にまで言い及ぶのは早計である。

実際、福井拓也は『道芝』における万太郎の自己演出的な編纂態度に注目している⁽¹⁰⁾。福井によると、『道芝』では句の配列や前書き、跋文によって句集全体を「私小説」的に読むよう企図されており、中には初出時と異なる意味づけを与えられている句もあるという。たとえば明治期の句「露のふるけしきに消ゆる水泡かな」は、関東大震災に関する句群の直後に置かれることで、震災後の感懐を詠んだ句として装われている⁽¹¹⁾。当時の俳壇では作者の「人生」に直結しない「客観写生」が台頭していたが、『道芝』はそうした時流に逆らいつつ、同時に、文壇で支配的な「私小説」に俳句を接続する試みと位置づけられるというのだ。

そもそも、『道芝』に載る明治期の句は『三筋町より』（一九二二・九、金星堂）の俳句篇「水中花」からさらに精選したもので、既にも多くの暮雨句が篩から零れ落ちている。また、『草の丈』（一九五二・一一・創元文庫）の一部「浅草のころ」には明治四十二年から大正十二年までの六十九句が収められるが、いずれが明治期の句か

は判然とせず、改稿の痕跡も認められる。万太郎自身は同集の序文において、「浅草のころ」の句群は「たゞ単なる前奏曲でしかない」と評し、他の部立と差別化している。しかし、こうした過去の自作に不満を覚える態度にこそ、万太郎における俳句評価の変化、言い換えれば、通時的な一貫性のなさが表れていると言えよう。

本稿ではこうした問題意識のもと、大正五年に俳句を再開する以前、明治四十年代における万太郎の俳業について考察する。特に、実際に当時の新聞雑誌を参照することで、従来看過されてきた暮雨時代の句作の実態を探っていく。句風の変遷をも含めた「万太郎俳句」の全体像は、能う限り多くの句を考慮してはじめて、臆気ながらも見えてくるのではないだろうか。

二 「運座育ち」の歩み

草間時彦は万太郎の句歴の特徴として、「雑誌育ちではなく、運座育ち」であることに注目する⁽¹²⁾。「特定の結社に属し、その結社の雑誌の雑詠に投句して勉強するという過程を全然経ていない」というのだ。草間によると、万太郎は松浜選の雑誌『趣味』と東洋城選の『国民新聞』に投句していたが、「それが久保田万太郎の俳句の活字になる機会に過ぎなかつた」という。だが、事実関係はひとまず措き、ここで言う「運座」に対する「雑誌」の位置づけはどれほど当時の実態に即しているだろうか。

万太郎は後年、初期の俳業を振り返るなかで、水巴らの「運座へはとき／＼行つたけれども、俳諧草紙へは句を出さなかつた」、あるいは、「『藻の花』の人達とはつきあつたけれども、俳句は出したことがない」と語っている。⁽¹³⁾ こうした発言に鑑みれば草間の指摘も一見妥当に見えるが、実際には『俳諧草紙』にも『藻の花』にも暮雨の句は載っている。そもそも、万太郎本人が投句していなくても、彼の句が活字になる機会は少なくなかつた。たとえば『国民新聞』に初めて載つた霍乱八句（明四二・七・二三）も、松浜宅で句作した際に同紙の選者だつた東洋城が偶々同席しており、後日万太郎の知らぬ間に紙上に掲げられていたのだという。⁽¹⁴⁾

さらに注意すべきは俳句雑誌に載る句会報である。『ホトトギス』の「東京俳句界」欄、「地方俳句界」欄をはじめ、当時の俳誌には各地の句会で出された句を報じるための句会報欄が設けられていた。それらの欄では、各会の報告者が当日の高点句などを取りまとめて投稿し、欄全体の選者が採否を決定する。当然、多くの運座に顔を出した万太郎の句もそうした句会報欄に頻繁に掲げられている。また、記事によつては参加者や会場の情報が記載されており、そこから句会を通じた交友圏の一端が垣間見える。以下では、実際に当時の俳誌に掲載された句会報に触れつつ、万太郎と句会の関わりを整理し直してみよう。

万太郎自身の回想によると、彼の実家の袋物屋には通いや住み込みの職人が大勢おり、そのなかに旧派の俳句を嗜む者がいたため、

彼らを通じて自然と俳句に親しんでいったのだという。⁽¹⁵⁾ 実際に句作を始めた正確な時期は不明だが、『中学世界』第九卷第三号（明三九・三・一〇）に「絵だくみは京にかへりぬ桃の春」が天位で採られている。

また白水郎の証言では、明治三十八年から翌三十九年まで転地療養中だつた彼のもとに万太郎から手紙が届き、「この頃、俳句を始めた」と知らされたという。⁽¹⁶⁾ その後、三十九年末に帰京した白水郎は、伊藤鷗二らの句会に誘われ、万太郎とともに出席する。このときの状況については別の箇所、家の前にある俵屋の息子で俳人の田中紫水から鷗二宅の句会に呼ばれ、「その半年前から、わたしに俳句をすゝめてゐた久保田を誘つ」たとも記している。⁽¹⁷⁾ この記述からも、万太郎の句作開始は明治三十九年前半と考えられる。

他方、楠本憲吉が石川久羅四郎（俳号は蒼海）から伝え聞いた話では、万太郎は明治三十九年に白水郎の紹介で白菊会という歌留多会に入会したが、同会はほどなく文芸の会に転じ、『白菊』という雑誌を出して随筆や歌俳を載せていたという。⁽¹⁸⁾ また明治四十年七月、万太郎は蒼海や白水郎、鷗二と銚子に遊び、その際の運座で「鬼灯や小銭はさみし昼夜帯」の一句を投じたとされる。鷗二によると、万太郎や白水郎を含む当時の俳句仲間には、「笹川四絃郎（魚屋の倅）、池田紅葩（仲見世人形師の倅）、三橋某（田原町酒舗の倅）達」、そして鷗二ら「日本橋党五六人に、後に碧梧桐の新傾向に走つた鹿嶋鳴秋」といった面々だつたという。⁽¹⁹⁾

こうした身近な仲間との句会は後々まで続くが、それに加えて秋声会派の運座にも足を運ぶようになる。白水郎によると、明治四十一年一月から万太郎や鷗二らと「運座あるきをはじめ」、同年の「春から夏にかけては、秋声派の運座へ出て、たゞ減茶苦茶につつゝゐた」という。²⁰この記述は、万太郎が『道芝』の自跋で、運座に参加し始めた時期を「明治四十一年の三四月ごろから」としていたことも合致する。

加えて留意すべきは、そうした「句会あるき」が当時の暮雨と俳誌を結びつける最初の契機となっている点である。万太郎は後年、「僕の句が始めて活字になつたのは、「卯杖」の会報だつたつけ」と振り返っている。²¹『卯杖』は明治三十六年から続く秋声会派の俳誌で、当時は文屋菱花が編集の任を担っていた。たしかに同誌を繕いいていくと、第六卷第六号（明四一・六・五）の「各地俳句会報」欄、「土筆会（浅草）」と「白菊会（日本橋少年俳句会）」の項に暮雨の句が一句ずつ掲載されている。

土筆会の詳細は不明だが、報告者は万太郎で、彼の句として「駕二艇麦にかくれて揚雲雀」が載る。また、第六卷第八号（明四一・八・五）の同欄では「鳴鑄会（土筆会改称、浅草）」と記載され、再び万太郎が報告する。このときは五月十七日と六月六日の分をまとめて報じており、それぞれに万太郎による簡略な前書が置かれる。同記事の暮雨句は六月の会に出された「紫陽花に小暗き寮のとはそ哉」のみ。かつて『中学世界』に載った「寮の夜の鼓に緋桃零れけ

り」（明三九・四・一〇、九卷五号）を思わせる和歌的な趣向である。なお、ここでは「土筆会」が「鳴鑄会」に改称したことになっているが、別の俳誌にはその後も「土筆五句集（浅草区）」（松浜選「東京俳句界」欄、明四二・四・一『ホトトギス』一二卷七号）や「土筆会（日本橋）」（『俳句会況』欄、白水郎報、同・七・一五『藻の花』六卷三号）といった句会報が見える。それらの記事には暮雨や白水郎、四絃郎らが名を連ねていることから、改称はせずに活動を続けていたのかもしれない。

また、先の『卯杖』の句会報欄には、土筆会とともに白菊会の記事も載っていた。このときの暮雨句は「葉の花に芝居触れ行く太鼓かな」で、ほかにも白水郎や、彼を初めて句会に誘った紫水の句も見える。万太郎によると、同会は浜町に住む白水郎が近所の「同志を糾合して（……）こしらへた」もので、「絶えず競吟をしたり運座をしたりし」ていたという。²²先述のように白菊会は当初歌留多会だったとされるが、この頃には既に句会の様相を呈していたようだ。

実際、日本橋大杉亭で開催された明治四十一年九月九日の白菊会には、暮雨らと並んで竹馬吟社の森鷗洲や行余会の出口叱牛の名も見える（『各地会報』欄、暮雨報「白菊会」の項、明四一・一一・五『卯杖』六卷一一号）。以降、同会の句会報は『俳諧草紙』や『ホトトギス』などに掲載され、明治四十四年一月まで暮雨の句が確認でき

る。こうした仲間内の句会が『卯杖』で初めて報じられたのは、秋声

会派の「句会あるき」の縁によるが、万太郎が最初に出席した該派の句会は深川の秉燭会だった。彼らの俳句仲間の叔父が同会の常連で、その人に誘われて参加し始めたのだという。⁽²³⁾ 当時の幹事は津谷至青で、秋声会派の重鎮である伊藤松宇や森無黄が選者を務めた。⁽²⁴⁾

同会の句会報は以前から『卯杖』に掲げられていたが、そこに暮雨の名が初めて見えるのは第六巻第九号（「東京地方俳句界」欄、明四一・九・五）のことである。このときの記事には暮雨や白水郎ほか四十名以上の句が並んでおり、暮雨の句は「潮浴て松の径を戻りけり」が採られている。その後も秉燭会の句会報には毎号のように暮雨句が載るが、『卯杖』自体が明治四十二年三月で廃刊したため、万太郎がいつ頃まで出席していたかは不明である。⁽²⁵⁾

他方、鷗二は万太郎らと参加した句会として、秉燭会や竹馬吟社と並んで樋口銅牛の朝日俳句会を挙げている。万太郎自身はこの会への参加について特段言及していないが、早くは明治四十一年六月二十四日の『東京朝日新聞』に「廻廊は南に長し杜若」と「鉄門や若葉にひたと鎖しけり」の二句が見える。その後も「勘当のうき身を瘦せて秋裕」（明四一・一〇・二三）や「返し歌の遅きを怨ずる松の内」（明四二・一・八）といった人事句が散見し、四十二年四月には一カ月で三十句が掲載されている。

なお、当時の『東京朝日新聞』では通常の俳句掲載に加え、毎月句会の成績と高点句も発表していた。それらの記事も含めて同紙には総計五十句以上の暮雨句が載るが、この運座には左程注力して

いなかったようで、成績表に彼の名が見えることは割合少ない。ただし後述するように、高点句には選者の銅牛が句評を寄せており、僅かながら暮雨の句に対する同時代評も確認できる。

ここで改めて万太郎の句会歴を確認しておく、まず明治三十九年末頃に仲間内の小規模な集まりに加わり、四十一年春から夏にかけて秉燭会や竹馬会といった秋声会系の句会、朝日俳句会にも出席し始める。そして同年秋、活動を再開した三田俳句会に出席するに及び、彼の句会めぐりは新たな局面を迎えることになる。ただし、同会に参加後も明治四十二年初め頃までは秉燭会や朝日俳句会と関わりを持ち続けており、白菊会などは相変わらず頻繁に開催されていたようだ。

三田俳句会は元々靱山江戸庵や岡本癖三酔らが明治三十年代に始めた句会で、早くは虚子や碧梧桐らも顔を出していた。同会の記事は『慶應義塾学報』にも断続的に掲載されていたが、万太郎らが「句会あるき」を始めた明治四十一年頃には一時活動が途絶えていた。⁽²⁷⁾

この三田俳句会の活動再開については白水郎の証言に詳しい。きっかけは虚子門の今村一声が世話する句会だった。一声は牟田口元学（東京鉄道会社社長）の別荘の門前に住み、別荘番をしていた。この牟田口の息子と吉村椿花が慶應義塾で同期だったこともあり、一声が学生たちの句会の面倒を見ていたのだという。その気紛れに開かれる小会を、椿花が三田俳句会としてまとめ直したのである。そして明治四十一年秋、白水郎は再開初回の告知を慶應義塾の掲示

場で目にし、万太郎とともに出席することとなる。

当時の三田俳句会は椿花と北島桂華が世話役で、椿花の師である水巴を招くこともあったという。水巴は内藤鳴雪や虚子に学んだ『ホトトギス』系の俳人で、当時は千鳥吟社を率いて機関誌『俳諧草紙』を刊行していた。万太郎は桂華の誘いでこの千鳥吟社の運座にも顔を出すようになり、その一方で水巴が桂華に連れられて白菊会に参加したこともある。²⁸こうして、近所の俳句仲間や秋声系の俳人たちとは異なる、新たな交流の輪が広がっていく。

さらに千鳥吟社の集まりで、客分として参加していた松浜を知る。『道芝』の跋文では「松浜を知つ」て「間もなく、わたしは、松浜を選者にもつ「趣味」の俳壇の勤勉な作者の一人になった」とあり、知遇を得た後に投句し始めたようにも読める。だが別の箇所では、彼を知る前に『趣味』に投句したことがあり、そのときに優遇されたため、以後同誌の熱心な投句者になったのだとも語っている。²⁹暮雨の句が同誌に初めて載るのは第四巻第一号（「趣味俳壇」、明四二・一・一）であり、遅くとも二月七日に開かれた千鳥吟社の例会で万太郎は松浜と同席している（「各地俳壇」欄、「千鳥吟社例会」の項、明四二・三・一〇『俳諧草紙』四巻五号）。その後明治四十二年七月に至るまで、万太郎は「趣味俳壇」の常連として七十句以上を同欄に掲げることとなる。

また、松浜と出会った明治四十二年には、三宅孤軒や栗原土桜らの藻花吟社にも接近したようで、同会誌『藻の花』掲載の「六月

中の入会者」のなかに暮雨の名が見える（明四二・七・一五、六巻三号）。加えて、本郷俳句会との繋がりも無視できない。同春秋、白水郎は「本郷五丁目の淀見軒といふ洋食屋の横丁に引越した」³⁰。

その近所に千鳥吟社の先輩である山田蕙子が住んでおり、水巴の勧めで彼と二人で『俳人』という雑誌を出すことになる。この『俳人』は本郷俳句会の機関誌だが、万太郎や鷗二も同人に名を連ねており、彼らの交友圏と重なる部分が多い。実際、同誌の句会報欄には千鳥吟社との合同句会の記事も掲載されている（「会報」欄、「本郷俳句会二月例会」の項、明四三・三・一五、一卷三号）。また、上毛桐生の谷口桃園が上京した際には、本郷俳句会と藻花吟社が合同で歓迎会を催しており、暮雨や白水郎、鷗二、蕙子、四絃郎などが出席している（「俳句会報」欄、「桃園氏歓迎俳筵」の項、明四三・一〇・一五『藻の花』七巻六号）。

それでは、暮雨が運座に出した句は当時の新聞雑誌とどう関わるのか。一例として、明治四十一年十一月二十日の三田俳句会の句について見てみよう。この日の句会報は『俳諧草紙』第四巻第二号の「各地俳壇」欄に掲載されている（桂華報「三田俳句会」の項、明四一・一二・一〇）。当日の参加者は九名（暮雨、水巴、椿花、杏所、倭葵子、白水郎、一声、桂華、静敏）で、第一回の運座は霰十句、五句互選。結果は暮雨が十四点で首位だった。彼の句としては「暈さす土間に火を乞ふ霰かな」が載る。二回目の運座は枯野と楯の二題十句で、再び五句互選。十六点の桂華を筆頭に、白水郎（一四点）

と水巴（一〇点）が続く。暮雨は九人中六番目の八点で、「馬市を雪に戻りて榎火かな」が掲げられている。

こうした句会後の新聞雑誌を見渡すと、万太郎と近しい人々の選句のなかにその日の作と思しき句が散見する。たとえば『俳諧草紙』の水巴選「冬雑吟」（明四二・一・一〇、四巻三号）には、右の句会報でも採られていた「馬市を」句が掲出されている。目次には「募集俳句」とあるが、句会当日は水巴も同座しており、彼がその席で録していた可能性もある。また、松浜選の『趣味』に初めて載った六句のうち、「栗飯をす、つて淋し櫓の宿」、「雪国の人とかなしき榎火かな」、「門に来てやむ雪舟唄や櫓明り」、「畑中の家に灯早し夕霽」の四句も、季題から見てもこの会で詠まれた句と推測される。松浜は当日参加しておらず、また先の発言に鑑みても、万太郎自身が投句したのでらう。

さらに、癖三酔選の『時事新報』俳句欄でも、記事名の下に「三田俳句会」と注記のうえ、「壁土の桶に蒔や夕霽」（『時事俳題』、明四二・一・二二）、「大嘘の男とめたる榎火かな」（同前、同・一・二二）、「売りし馬思ひ惜しみや櫓の主」（同前）、「梁の煤けて高し櫓明り」（同前）といった句が載っている。万太郎は『白水郎句集』（前掲）の序文において、自身は「松浜の艶冶な句風に傾倒してその主宰する『趣味』の俳壇の投句家になつた」としつつ、白水郎は『時事新報』の俳壇の勤勉な作者になつた」と対比的に語っている。だが右の句以降、同年六月十七日までの間に暮雨の句も三十句以上

『時事新報』に掲げられている。なお白水郎によると、同紙上の句は癖三酔によって「親切に加朱して掲載され」ていたそう⁽³¹⁾で、何を以て暮雨句とみなすかは一考の余地がある。

三 暮雨の句風

ここまで、明治期の俳誌に載る句会報を交えながら、万太郎の最初期の俳歴を辿ってきた。それでは、当時の暮雨句には具体的にどのような傾向が見出せるのか。後年の彼は自身の俳句を「即興的な抒情詩、家常生活に根ざした抒情的な即興詩」と位置づけている（『道芝』、「跋」）。さらに後には、「小説家であり、戯曲家であり、新劇運動従事者でありするわたくしの「心境小説」の素に外ならぬ」（『ゆきげがは』、一九三六・八、双雅房、「後記」）、あるいは、「わたくしの生活識域をはなれてわたくしの俳句は存在しないのであります」（『久保田万太郎句集』、一九四二・五、三田文学出版部、「後記」と語っている。こうした「家常生活」や「生活識域」に根ざした「抒情詩」という自己評価は、抽象的であるが故に例句の選択次第でどの時期の句作にも当てはまり得る嫌いがあり、傾向の指摘としては些か具体性に欠ける。

芥川龍之介は『道芝』に寄せた序文のなかで、万太郎の句風を「抒情詩的」と概評しつつ、具体的な句の傾向にも言及している。芥川の見立てによると、万太郎には「所謂人事の句が頗る多」く、「所

謂天文地理の句も大抵は人間を、——生活を、——下町の句を漂は

せてゐる」という。この点については久米正雄も指摘するように、

万太郎の句には「楽屋落」とも言えるほど深く浅草の生活に根差した側面がある⁽³²⁾。久米はその一例として、浅草界隈の「茶畑」に由来

する、「浅草の茶の木ばたけの雪解かな」と「茶ばたけのなかの夜寒をたどるかな」を挙げるが、暮雨時代の「茶畑の家で灯す秋の暮」

(東洋城選、明四三・一〇・二八『国民新聞』)も同様の背景を控えた句と考えられる。そのほか地名を明示した句としては、「深川の

埃佗ぶなり古日傘」(東洋城選、明四二・八・一四『国民新聞』)や「舟人や江戸深川の濁り酒」(同前、同・一〇・二三、同前)、「短日

やけふの案内の泉岳寺」(明四三・二・五、同前)、「品川の茶屋の眺めの干潟かな」(松浜選「趣味俳壇」、同・七・一『趣味』五巻七

号)などがあり、山の手材を得た句は少ないようだ。

「秋風の廓に近き箕輪かな」(東洋城選、明四二・一一・一七『国民新聞』⁽³³⁾)もそうした下町の地名を含む一句。当時の万太郎に廓の句が特段多いわけではないが、「海羸打や廓灯りて別れけり」(同・

一一・一二、同前)⁽³⁴⁾は情趣ある土地の風俗に追懐の情も相俟って、代表句の一つに数えられる。こうした灯点し頃の廓の情景は殊に万

太郎の意に適っていたようで、「廓の灯も蘆の江遠し夏の月」(松浜選「募集句選」、同・七・一〇『手紙雜誌』八巻七号)や「廓の灯

の幾夜淋しき燈籠かな」(同前「六十句」、同・一一・三〇『俳諧草紙』四巻一三号)、「燈籠や廓の花に萩桔梗」(同前)といった句も

詠まれている。

他方、万太郎自身の「生活」にまつわる句としては、彼の読書体験を窺わせる句も少なくない。たとえば、「春を待つ人が書いたる戯作かな」(松浜選「俳句」、明四三・二・一『警世』八巻二号)で

は眼前の戯作から、時を隔てた作者の境涯に思いを馳せる。また、「世之助の幾つの春の雛かな」(東洋城選、明四二・四・二四『国民新聞』)は井原西鶴『好色一代男』の、「草餅や田舎源氏の誰に似て」

(松浜選「趣味俳壇」、同・五・一『趣味』四巻五号)は柳亭種彦『修紫田舎源氏』の登場人物に関する句だが、いずれも先の「春を待つ」

句同様、「雛」や「草餅」を契機としてそれらを思い浮かべる点に眼目がある。「俳諧に其角ありける師走かな」(松浜選「俳句」、明

四三・三・一『警世』八巻三号)の場合、師走ということで歌舞伎の『松浦の太鼓』などに描かれる宝井其角と大高源五の逸話を想起

したのか、江戸の都市俳人に思いを致す。万太郎自身が其角の俳風に親炙したと見る必要はなく、そうした想起のあり様自体を趣向と

した一句と言える。

さらに江戸の諸文芸以外にも、「藤咲くや伊勢読みあきて大鏡」(水巴選「春季雑吟」、明四二・五・一〇『俳諧草紙』四巻七号)⁽³⁵⁾で

は、歌物語や歴史物語に拘らない気儘な読書子の姿が描かれる。またそこに藤を取り合わせるとき、『源氏物語』の面影も漂うが、暮

雨には別に「菊雛は淋し源氏の何の巻」(松浜選「六十句」、同・一

一・三〇『俳諧草紙』四巻一三号)⁽³⁶⁾の一句もある。ここでも特定の

場面の描写ではなく、「菊雛は淋し」という感興から直ちに『源氏物語』を想起するような、古典に馴染んだ人物の姿が髣髴とすればよい。

この「菊雛は」句に限ったことではないが、芥川は万太郎の句に「淋し」や「あはれ」といった表現が散見することを指摘している（前掲『道芝』「序」）。岩下南子も同様に、万太郎には「淋し」や「なつかし」、「あはれ」、「はかなし」といった「感情を直叙する言葉を好んで用」いる傾向があるとし、その句の根底に「淡い哀愁感」を読み取る（蕙子記「研究会紀要」、一九三二・二・一『春泥』一二号）。これらは主に『道芝』に対する評言だが、「淋し」を用いた句は明治四十一年末から四十四年初めまでのおよそ二年の間に三十句以上見出せる。たとえば、「荷に包む雛淋しやお国替」（水巴選「二季雜吟」、明四二・三・一〇『俳諧草紙』四卷五号）、「灯にそむく人淋しけれ蓬餅」（松浜選「春夏雜吟（八号分）」、同・七・一〇『俳諧草紙』四卷八・九号）、「夏菊の赤きは淋し鮓の桶」（同「東京俳句界」欄、「浜町俳句会」の項、明四二・九・一『ホトトギス』一二卷一二号）などで、「淋し」という端的な心境の表現が「哀愁感」を演出する要となつている。

またこうした「淋し」の句では、「霍乱の人の夢路や波淋し」（東洋城選、明四二・七・二三『国民新聞』）や「海嵐打に日影移りぬ菊淋し」（同前、同・一一・一二、同前）、あるいは以下の句などのように、名詞に直接接続する終止形「淋し」の用例が散見する。

渡る鳥もなくて暮れけり霧淋し

（松浜選「東京俳句界」欄、「松柏廬句録」の項、明四二・

一一・一『ホトトギス』一三卷二二号）

門を出る時客淋し夕霰

（同前、「白菊会」の項、明四三・三・一、同前一三卷六号）³⁷

橋下の夕浪淋し汐干人

（松浜選「俳句」、同・六・一『警世』八卷六号）

紫蘇淋し水濁りたる冷奴（同前、同・九・一、同前八卷九号）

梅淋し我のみ待ちてこの忌日

（松浜選「東京俳句界」欄、「芙蓉会」の項、明四四・二・一『ホトトギス』一四卷六号）

連体形「淋しき」の場合は「浜寺の松は淋しき蓮かな」（松浜選

「東京俳句界」欄、笹川徳太郎報「春の夜会」の項、明四二・九・

一『ホトトギス』一二卷一二号）のように、「淋し」が主に後続す

る語句の性質を説明している。一方、右の句群では感情形容詞「淋し」に前接する格助詞を用いていないため、感情を喚起する対象だけでなく「淋し」と感じる主体の存在が言外に想起される。こうした用法には「暮淋し花の後の鬼瓦 友五」（荷兮編『阿羅野』卷之一、

元禄二序）や「品川の横町淋し蔦かづら 桃隣」（桃隣編『陸奥衛』

一、元禄一〇跋）の例もあり、暮雨の創見にかかるものではないが、名詞と「淋し」の間に助詞を欠くことで詰屈な印象を与え、平仮名

を多用した後年の緩やかな句風とは些か趣を異にする。

ここまで主に句の趣向に注目してきたが、最後に句法上の特色、特に切字の傾向についても触れておきたい。三度芥川の『道芝』序文を参照すると、「久保田氏は下五字の中に「けり」を使ふことを好んでゐる」という。また、成瀬櫻桃子は芥川の評に賛同しつつ、「万太郎俳句には(……)「けり」で詠嘆した句が、ずば抜けて多い」と述べており、高柳克弘も万太郎の句集における「けり」の多さに言及している。⁽³⁸⁾ たしかに、『道芝』には「新参の身にあかくと灯りけり」⁽⁴⁰⁾や「神田川祭の中をながれけり」(前書「島崎先生の「生ひ立ちの記」を読む。——ありし日の柳橋のほとりの家々のさま思ひいでる」といった下五「けり」切れの印象的な句も含まれる。だが実際に同集所収句には下五「かな」切れの方が若干多く、さらに暮雨時代に関する限り、特段「けり」を多用していたわけではない。

一方、万太郎の切字の特色として、「かな」に注目する先行論も少なくない。山本健吉によると、「秋の雲みづびきくさにとほきかな」(『冬三日月』、一九五二・三、創元文庫)のような「体言を承けないかな止め」(傍点ママ)は「体言につく「かな」よりずっと軽く」、万太郎にはこの用例が多いという。⁽⁴¹⁾ また成瀬櫻桃子も、『流寓抄』(一九五八・一一、文藝春秋新社)と『流寓抄以後』(一九六三・一二、文藝春秋新社)の句を例に、「沖の荒れこ、までとゞく芒かな」のような「名詞かな止」と、「鮫鱈もわが身の業も煮ゆる

かな」のような「形容詞・動詞かな止」を分け、後者を万太郎句の特徴とする。⁽⁴²⁾ 他方、高柳克弘は「万太郎の特徴」の一つとして、「鶯に人は落ちめが大事かな」(前掲『流寓抄』)のように「に」のあとに軽い切れが入る、「○○に××かな」の文体」に言及する。⁽⁴³⁾ 「切字「かな」を好んで闇雲に多用したのではなく、その用法にも特色があるというのだ。

明治期の暮雨句およそ八〇〇句を通観してみると、「けり」切れの句が百句程度であるのに対し、下五「かな」切れの句は三五〇句に垂んとする。また、「や」切れの句も約二八〇句あることから、むしろ「けり」の用例は相対的に少ないことが分かる。ただし、「かな」切れのなかでも先行論で言われる「体言を承けないかな止め」(山本健吉)、「形容詞・動詞かな止」(成瀬櫻桃子)は僅かに二、三例に止まる。また助詞「に」を併用する場合も、「本所に住みて小さき炭家かな」(松浜選「趣味俳壇」、明四三・一・一『趣味』五巻一号)のように、明確に場所や対象を指示する用例が主であり、高柳の言うような万太郎独自の傾向は認め難い。そうである以上、右に言われる万太郎句の特徴は早くとも大正五年の俳句復帰以降のものと考えねばならず、その移行時期についても精査が必要である。付言しておく、後年の万太郎は自句のなかに平仮名を多用しているが、ここまで見てきた句からも分かるように、明治期にそうした顕著な傾向は認められない。また、世評の高い前書付きの句についても、暮雨時代には「小説「竹の木戸」」の前書がある「盗まれ

「し炭の詮議や霜の朝」(樋口銅牛選、明四一・一二・一二『東京朝日新聞』朝刊)ほか、二、三句を数える程度である。なるほど、後年の万太郎にホトトギスの系脈には属さない独特の句境があることは否定できない。しかし、暮雨時代には見られないそれらの個性は、いつ、どのような過程で前景化してきたのか。この点は今後検証の余地があるだろう。

四 暮雨句に対する同時代評

ここまで見てきたように、明治期の暮雨句には後年に通じる趣向が散見する反面、切字や仮名、前書といった表現的な側面に際立った個性は認めがたい。それでは、彼の句は同時代にはどのように評価されていたのか。「運座育ち」の暮雨だけあって、新聞雑誌に俳論や俳人評を掲げるなど、同時代俳壇に積極的に関わることはなかった。また、句会で接した俳人たちの顔触れからも分かるように、明治四〇年代に興隆する新傾向俳句とは縁遠い。万太郎本人も後年、「新傾向句のおよそ生硬な、押しつけがましい、感情の渴き切つた表現からして気に喰はなかつた」と振り返っている。⁽⁴⁴⁾翻つて、俳壇の主潮とは一線を画する彼の句が、当時殊更に大きく取り上げられることはなかつたようだ。

そうした暮雨句の数少ない同時代評の一つに、『東京朝日新聞』における樋口銅牛の評語がある。万太郎は「運座あるき」のなかで

東京朝日俳句会にも顔を出していたが、彼の句が初めて高点句として取り上げられるのは、第十五回の朝日俳句会の記事である。選者の銅牛はこのときの暮雨句「八つ頃に雨降り出でし門茶哉」について、「平淡の中に複雑の景を含めり、悪句にあらず」と評している(『朝日新聞俳句会高点句』、明四一・九・三『東京朝日新聞』朝刊)。「門茶」は陰曆七月の風習で、供養のために寺の門前などで通行人に茶を施すこと。雨に降られて捗々しくない門茶を詠んだ一句で、中七までの描写からやや時間の経過した様子が読み取れる。本句に対する銅牛の評語は肯定的だが、彼の句評は概して批判的であり、高点句であっても辛辣に批判している。実際、「野埃に芽ぐむ大樹も詣で哉」の場合、「詣でかな」とばかりでは少々不明⁽⁴⁵⁾だし、「一句に亘りて叙法が未熟」な「未製品」として一蹴する(『朝日俳句会高点句』(二)、明四二・三・三一『東京朝日新聞』朝刊)。

また、銅牛は句評に際して改案を示すことがあるが、そこから万太郎との関心のずれも垣間見える。たとえば「あらぬ夢見てうき風邪の夜頃哉」については、「夢見て」を「夢見る」にすべきだとしたうえで、銅牛流の改案「うき風邪の夜頃悪夢も見たりけり」を示している(『朝日俳句会高点句』、明四一・一二・二『東京朝日新聞』朝刊)。銅牛の案では夢の内容を「悪夢」に限定しており、「あらぬ夢」と含みを持たせた原句の趣向を単純化しているように見受けられる。また、「菜の花や駕からまきし供養銭」(『朝日俳句会高点句』(二)、明四二・四・二九同前)の場合、中七の助動詞「し」は過

去を表すと指摘したうえで、「既にまきたる後の光景なり、現在とせむに如かず」と指摘する。そのうえで銅牛は、「供養錢駕からまくや花菜道」との改案を示し、「御忌詣などの富家翁を想はしむべし」と提案する。原句では、撒いた場面を過去として詠んだのか、既に撒かれた供養錢に焦点を当てたのか分かりにくい。銅牛は前者を強調したが、「富家翁」まで想到し得るかは疑問であり、原句の趣向をより具体化しようとする点では「あらぬ夢」句に通じる添削と言える。ともあれ、『東京朝日新聞』における暮雨は数多の投句者の一人という位置づけで、特段注目を集めていたわけではないということには留意しておきたい。

最後に取り上げるのは、松浜選「連夜会句録」(明四三・五・一『趣味』五巻五号)と、同記事に対する渡辺水巴の評である。この句会は明治四十三年二月上旬から二十日間にわたって松浜宅で催され、彼の庵号に因んで「寒菊堂連夜句会」と称された⁽⁴⁵⁾。記事には各日の出席者数も示されているが、松浜の選を経た句しか掲出しておらず、初日は三名が出席して一句も載っていない(以下、同記事の記述に倣い各日の会を「第一会」、「第二会」と表す)。それゆえ、各会の出席者を正確に把握することはできないが、暮雨の句は第二会から第二十会まで十会にわたって計十二句載る。彼のほかに句が掲げられているのは、蛇笏(一八句)、松浜(二四句)、喜舟(四句)、句之都(一句)、水巴(一句)、章荷(一句)、掬詩泉(一句)であり、ごく小規模な催しであったようだ。

この連夜会会に対して水巴が『文庫』誌上に批評を掲げおり(「連夜会句録評」、明四三・六・一五、四〇巻一〇号)、当時としては割合大きく暮雨の句も取り上げている。二十日間のうち二度ほど飛び入りで参加した水巴は、「作家くゝの苦心」を「愉快」と感じ、所感を書く気になったのだという。記事では句録中の句を作者ごとに取り上げており、最初に暮雨の句から批評を始めている(以下、句の表記は水巴の記事に拠り、元の記事の会数と題を併記した)。

まず、「山谷迄行かば駕ある暮雪かな」(二会、題「雪」)については、「如何なる場合か種々に解される」としたうえで、「何処を起点として山谷と指したのかも不明」だとする。またそれゆえ、「漫然として何等取りとまつた景色も現はれねば心持も起らぬ」というここでの水巴は想起される「景色」に重きを置くが、万太郎としては夕暮れ時に雪に降られて「山谷迄行かば」云々と思いつく、その土地勘こそが眼目だったのではないか。

第四会の暮雨句は「胼の手にこは古雛のおん衣かな」(題「胼、鴛鴦」)だが、水巴は「斧鑿の痕がありく」と見える」とし、「胼の手」と「古雛のおん衣」を「取り合せて見せ付けた厭味な句」と難じている。また、第六会の「寒声や昔曇りし京の月」(題「寒声」)については、「作者選者共に好嗜とする「なつかしみ」の句であらうが、中七が余り曇り過ぎてむづ痒い」と評する。これらの評からは、趣向の作為性を嫌う水巴の批評眼が窺えるが、注目されるのは作者暮雨と選者松浜に共通の嗜好を認めている点である。水巴の言

う「なつかしみ」が「昔」を思い遣ることであるならば、先述した近世文芸への愛着なども同系統の句と言えよう。また、この「寒声や」句については、月に力点を置いて「内容をほのめか」さなければ「作者の一人好がりになる」とし、その点を以て「常に暮雨君の欠点と認める」と説く。平生から暮雨句に接してきたことが分かる評で、「作者の一人好がり」という指摘は馴染みの地名を詠んだ句にも当てはまるだろう。

続いて、「乾鮭を吊るは売るなり山眠る」(七会、題「凍、山眠る」)、「二三軒枯野の宿の冬至かな」(一一会、題「枯野、寒さ」)、「餅搗やほどなく消えし芝の火事」(一二会、題「名草枯、餅搗」)「春雨や淵の廂の花一朵」(一七会、題「春雨、壺焼」)をまとめて、「作者が従来への行き方と甚だ異つて居る処に先つ興味があつて面白く読んだ」と評価し、なかでも「春雨や」句については、同記事の暮雨句中で最も「秀逸」と賞賛している。水巴によると、「廂の花一朵」という「技巧」には「斧鑿の痕が無く」、「景趣の叙法」に大きな効果を發揮しているという。また、「調子も緊密」で「潤沢がある」とし、特に「淵」の一字を取り上げてこう評する。「大景の一部分、蕭条たる春雨に一朵の花の下、底知れぬ水紺碧に湛えて流るゝともなきを見れば、一種悽愴の感を生じて種々の聯想はそれからそれと起る」。

こうした手放しの称賛は「春雨や」句にのみ顕著であり、続く「花人に貸したる船の蛙かな」(二八会、題「紙鳶、蛙」)については、

松浜の説明を踏まえつつも、その解釈に異を唱えている。松浜によると、本句は「花見の人に乞はれて其処の川辺に繋いである夫れも水垢浸つてむさくるしい小舟(百姓所有の物とでも見る)を貸した、それに蛙が居る」という趣向の句だという。小舟の説明は松浜の恣意的な想像に拠るところが大きい。水巴はこれに対し、中七は「貸す船」と現在にせねばならぬ」と指摘する。そうでないために「貸主と漕ぎ出す船との間が生じて、「蛙かな」が後から据え物にしたやうに思はれる」というのだ。この点は先述した朝日俳句会高点句の「籠からまきし」や、第六会の「昔くもりし」に通じる手癖と言えようか。

第十九、二十会の句については省略するが、同記事からは、暮雨句の従来への傾向を指摘するほど、水巴が彼の句に接していたことが分かる。『東京朝日新聞』では多くの投句者と同列に遇されていた万太郎だが、松浜や東洋城を含め、こうした近しい俳人たちとの交流のなかで彼の初期俳句は磨かれていったのである。

五 おわりに

本稿では、明治四十年代の新聞雑誌を辿りながら、万太郎が暮雨と号していた頃の俳業について考察してきた。まず、先行研究では考証が不十分だった最初期の「句会あるき」に関しては、その動向を整理し直し、当時の諸媒体に載る句との関係性などについて指摘

した。次に、従来参照されてこなかった俳句欄や句会報をもとに、暮雨の句風や彼に対する同時代評を概観した。先行研究で言及される明治期の句は、概ね後年の句集に依拠していたが、暮雨時代にはそこに認められるような個性の多くは認め難い。「生活」に根差した「抒情詩」という抽象的な評価に含まれ得る句も少なくないが、そうした傾向が具体的にどのような表現によって析出されるのかという点については、今後も検証の余地がある。いずれにせよ、暮雨時代の初期俳句にも光を当てることは、自明視された「万太郎俳句」の一貫性を批判的に見直す手掛かりとなるだろう。

ただし改めて強調しておく、本稿で見てきた暮雨句の傾向を以て直ちに万太郎俳句の全体像が更新されるわけではない。また、本稿で触れた句や句会報も暮雨時代の俳業の一部に過ぎない。特に、明治四十年頃に白水郎や鷗二らと開いたという仲間内の句会については、未刊行の資料を含めた調査の必要があるだろう。大正期以降の俳業にしても、自選句集に収められた句のみを考察しては、句集編纂時に演出された既存の「万太郎調」を追認することになりかねない。そうした偏向性を気に留めないまま安易な「全貌」や「全体像」、「全句」を喧伝するのではなく、まずは公表された万太郎句をできる限り収集し、初出や改作過程を整理することが肝要だろう。論者が期待する「万太郎調」ではなく、句風の変遷を跡づけるに足る研究基盤の整備が俟たれる。

注

(1) 戸板康二『久保田万太郎』(一九六七・一一、文藝春秋、「その教室」、「その俳句」)。安住敦によると、俳句は万太郎の「数多くの文学作品の最上位にさへ置かれて論じられることもなくはない」という(『久保田万太郎全句集』、一九七一・五、中央公論社、「解説」)。

(2) 「季題別全俳句集」と「季題別全俳句集 拾遺」は「久保田万太郎全句集」(同注(1))にも併録されるが、句の追加はない。なお、拙稿「暮雨久保田万太郎俳句纂録——明治四十二、三年の句を中心に——」(二〇二一・一一「文藝と批評」一三巻四号)では、全集未収録句を含む明治期の句およそ八〇〇句を紹介した。

(3) 安住敦「解説」(久保田万太郎『草の丈』、一九五二・一一、創元文庫)、石川桂郎「久保田万太郎」(『俳句講座8 現代作家論』、一九五八・一二、明治書院)、草間時彦「俳人久保田万太郎」(一九七四・五「俳句」二三巻五号)、後藤杜三「わが久保田万太郎」(一九七四・五、青蛙房、「朝顔」)など。

(4) 戸板康二『久保田万太郎』、同注(1)。

(5) 安住敦「解説」(同編『久保田万太郎句集』、一九五四・七、角川文庫)。石川桂郎も安住の記事を引きながら、万太郎句に「微妙な変化」を認める(『久保田万太郎』、同注(3))。

(6) 戸板康二・高橋健二編『日本近代文学大系 第41巻』(一九七三・八、角川書店)、小島政二郎『俳句の天才、久保田万太郎』(一九八〇・六、彌生書房)、戸板康二『万太郎俳句評釈』(一九九二・一〇、富士見書房)、成瀬櫻桃子「久保田万太郎の俳句」(一九九五・一〇、ふらんす堂)、伊藤通明『蝸牛俳句文庫』(一九九七・一、蝸牛社)、小澤實『万太郎の一句 365日入門シリーズ 澤俳句叢書第二篇』(二〇〇五・七、ふらんす堂)など。

(7) 楠本憲吉『近代俳句の成立』(一九五五・六、現代書房、「万太郎俳句私観」)。

- (8) 楠本憲吉「久保田万太郎の俳句」(佐藤朔・池田弥三郎・白井浩司編「久保田万太郎回想」、一九六四・一二、中央公論社)。
- (9) 高柳克弘「どれがほんど? 万太郎俳句の虚と実」(二〇一八・四、慶應義塾大学出版)。
- (10) 福井拓也「久保田万太郎『道芝』論」(二〇二〇・二「国語と国文学」九七卷二号)。
- (11) 福井も指摘するように、初出は明治四十二年十一月二十八日の『国民新聞』俳句欄。ただし、上五・中七の表記は「露の降る景色に消ゆる」。以下、掲載紙誌によって表記に異同がある場合はその箇所のみを注で示す。
- (12) 草間時彦「俳人久保田万太郎」、同注(3)。
- (13) 久保田万太郎・鈴木燕郎「対談 国民俳壇その他」(一九五四・一〇「俳句」三卷一〇号)。
- (14) 久保田万太郎・楠本憲吉「対談俳句史 第6回 来し方万太郎俳句」(一九六〇・一「俳句」九卷二号)。楠本憲吉「対談 近代俳句」(一九六六・七、桜楓社)に収録。引用は同書に拠った。なお、楠本は「晒井の衆の誰への使かな」を霍乱八句以前の句として「国民俳壇」の「先登の第一句」と位置づけるが(楠本健吉「久保田万太郎の俳句」、同注(8))、同句は七月二十九日の掲載であり、霍乱八句よりも六日遅れる。
- (15) 久保田万太郎・楠本憲吉「対談俳句史 第6回 来し方万太郎俳句」、同注(14)。
- (16) 大場白水郎・中村汀女・富安風生「座談会 初学時代」(一九五五・五「俳句」四卷六号)。
- (17) 大場白水郎「序」(伊藤鷗二「鷗二俳論」、一九三〇・一〇、俳華堂書房)。
- (18) 楠本憲吉「久保田万太郎の俳句」、同注(8)。楠本は情報提供者を「石川久」とするが、戸板康二は同じ挿話の人物を「石川久羅四郎」としており(「久保田万太郎」、同注(1))、後者が正確な記述と見られるため、そちらを採用した。
- (19) 伊藤鷗二「万太郎さんの一面」(一九五五・一一「俳句」二二卷二二号)。
- (20) 大場白水郎「縷紅亭雜記」(一九四〇・五、春泥社、「明治四十一年のこと」)。
- (21) 久保田万太郎・小泉迂外・伊藤鷗二・山田蕙子・内田誠・長谷川春草「俳諧無駄話」(一九三〇・一一・一「春泥」一〇号)。
- (22) 久保田万太郎「序」(大場白水郎「白水郎句集」、一九二八・八、俳書堂)。
- (23) 久保田万太郎「夏と町々」(「不動さま」の条、一九三〇・三「海酸漿」、大岡山書店)。ただし、後年の発言では「仲間の一人の親父」としている(久保田万太郎・楠本憲吉「対談俳句史 第6回 来し方万太郎俳句」、同注(14))。
- (24) 大場白水郎・中村汀女・富安風生「座談会 初学時代」、同注(16)。
- (25) ただし、俳誌『千代田』第二卷第一号(明四三・一一・一八)の「各地俳壇」欄、至青報「秉燭会」の項では、暮雨句「朝霜に掃き居るやよべの日僧」が掲載されている。
- (26) 伊藤鷗二「万太郎さんの一面」、同注(19)。
- (27) 大場白水郎・楠本憲吉「対談俳句史 第4回 三田俳句会から俳諧雜誌まで」(一九五九・一〇「俳句」八卷一〇号)。
- (28) 大場白水郎「藻花吟社・千鳥吟社時代——明治大正俳壇史話(七)——」(一九三九・一「俳句研究」六卷一号)。実際、『俳諧草紙』の「各地俳壇」欄(暮雨報「白菊会」の項、明四一・一一・一〇、四卷二号)で水巴の出席が確認できる。
- (29) 久保田万太郎・楠本憲吉「対談俳句史 第6回 来し方万太郎俳句」、同注(14)。
- (30) 大場白水郎「忘れ得ぬ人々(三)——内藤鳴雪——」(一九五三・三「俳句」二卷三号)。
- (31) 大場白水郎「忘れ得ぬ人々(一)——岡本癖三醉——」(一九五二・一二「俳句」一卷七号)。
- (32) 久米正雄「万太郎俳句覚書」(久米正雄・久保田万太郎「互選句集」、一九四六・九、文藝春秋社)。

- (33) 下五「三輪かな」(松浜選「東京俳句界」欄、「趣味俳壇五句集(麴町区)」の項、明四三・二・一「ホトトギス」一三卷五号)。
- (34) 「海贏うちや廓ともりてわかれけり」(前掲「三筋町より」)、「海贏の子の廓ともりてわかれけり」(前掲「草の丈」)。
- (35) 中七「伊勢読み飽きて」(「東京俳句界」欄、「春の夜会」の項、明四二・六・一「ホトトギス」一二卷九号)。
- (36) 下五「なんの巻」(「東京俳句界」欄、「紫芳吟社」の項、明四二・一二・一「ホトトギス」一三卷三号)、下五「何んの巻」(天郎・燕郎「俳壇」、同・一一・一「宗教界」五卷一一号)。
- (37) 下五「夕みぞれ」(「会報」欄、「白菊会」の項、明四三・三・一五「俳人」一卷三号)。
- (38) 前掲成瀬書、同注(6)、「俳人 久保田万太郎」。
- (39) 前掲高柳書、同注(9)、「切れと切字」。
- (40) 本句は「新参の身にあげやすし帳簿」(「俳句界」欄、川野一昇報「七夕吟社」の項、明四二・八・一「アラレ」六卷八号)を夕刻の情景に転じたか。
- (41) 山本健吉「定本 現代俳句」(一九九八・四、角川選書、「久保田万太郎」)。
- (42) 前掲成瀬書、同注(6)、「万太郎俳句の構造1——切字について——」。
- (43) 前掲高柳書、同注(9)、「切れと切字」。
- (44) 久保田万太郎「三汀の句」(前掲「互選句集」、同注(32))
- (45) 野村喜舟「岡本松浜氏の想ひ出」(一九三九・一〇「俳句研究」六卷一〇号)。岡本春人編「定本岡本松浜句文集」(一九九〇・七、富士見書房)に収録。引用は同書に拠った。

※引用に際してルビと圏点は原則として削除し、旧字は適宜新字に改めた。引用中の省略は三点リーダー(……)で示した。作者名のない句の引用はすべて暮雨の句である。また、句会報の表題に地区名が併記されている場合は適宜省略した。